



黄色を背景に円と三角と四角の形象が腸のように捻られ、螺旋状と化す。江戸時代の禅僧仙崖の との関連性、ユーモアの感覚、驚嘆すべきデッサン力と西洋美術の知識、地と図の関係、メビウスの輪から導き出されるパラレルの相克はカタログで舟木力英氏が指摘している通りである。当然、舟木氏の指摘を前提とした上で、松本安良の絵画の魅力を探らなければならない。

松本は今回、《類似の関係》というタイトルのヴァリエーション作品の正方形を三枚ハート型に連ねた大型作品を2点、三枚組の大型作品を1点、二枚組みの大型作品を1点、一枚の中型作品を1点、小品6点を出品した。

会場に入って先ず目に付いたのは、やはり描かれている形態である。円、三角、四角は総ての形の根底と為していると発想するのは、東洋的な解釈であろう。総ての作品は植物のように円、三角、四角という葉を末端として枝を持ち、幹に到って地に潜っていく。根こそ描かれていない点を考慮に入れると、描かれているのはツリーではなく地下のリゾームなのかも知れない。

すると天地が反転する。ここには無限連鎖という地獄よりも、輪廻的な宇宙観を感じる。天と地が反転するとはどう

いうことか。天国にいると思っていたら地獄だった。地獄の苦しみだと感じていたら天国の快樂であった。ここにこそ「ユーモア」の本来の意義が隠されているのではないだろうか。

反転しているのは松本の技法でもある。松本が今回出品した作品の素材は総て、和紙にアクリル、その他である。西洋画のデッサンの手法を身につけたものが描く線であると解釈することができよう。しかし、和紙に注目して連なる作品を襖絵や屏風に見立てることも不可能ではあるまい。しかし松本の作品は、洋画にも日本画にも見えないのは何故か。やはり松本の作品は反転しているのだ。

各作品に近づいてよく見ると、描かれている円、三角、四角よりも、染みのように広がる滲み、ポーリングとも垂らし込みとも言える撒き散らされた顔料、幾層にも描き綴られている描線などの存在が、画面を複雑にし、奥行きと深みを形成していることに気が付く。松本の作品の真髄はここにあり、同じ作品でもライティングによって表情が大きく変化するので異なる場所で再確認したくなるのである。

思えば地を大切にしている発想は、古来、東西共に金箔を使用している。この関連性も、今後の考察の視野に入れたい。